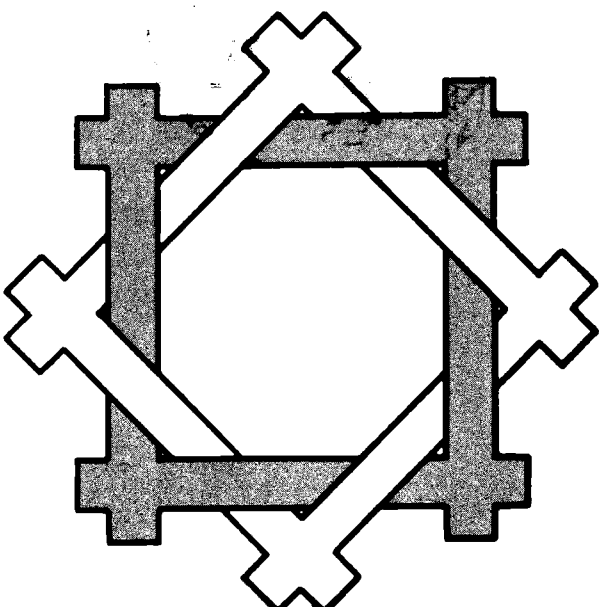
樋口一葉作品集

1

樋口一葉作品集

1



樋口一葉作品集第一巻

昭和四十九年六月二十日発行

著者　樋口一葉

発行者　八木敏夫

印刷者　長山留二郎

発行所　昭和出版社
東京都千代田区神田神保町一ノ四五

第一卷目次

闇櫻……三
たま襷……一〇
別れ霜……二三
五月雨……五六
うもれ木……七一
經つくゑ……九八

暁月夜……一〇九
雪の日……一三〇
琴の音……一三五
花ごもり……一四〇
やみ夜……一六〇

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

樋口一葉作品集

第一巻

闇櫻

上

隔ては中垣の建仁寺にゆづりて汲かはす庭井の水の交はりの底きよく深く軒端に咲く梅一木に兩家の春を見せて薫りも分ち合ふ中村園田と呼ぶ宿あり園田の主人は一昨年なくなりて相續は良之助廿二の若者何某學校の通學生とかや中村のかたには娘只一人男子もありたれど早世しての一粒ものとて寵愛はいとゞ手のうちの玉かざしの花に吹かぬ風まづいとひて願ふはあし田鶴の齡ながゝれとにや千代となづけし親心にぞ見ゆらんものよ梅檀の二葉三ッ四ッより行末さぞと世の人のほめものにせし姿の花は雨さそふ彌生の山ほころび初めしつぼみに眺めそはりて盛りはいつとまつの葉ごしの月いざよふといふも可愛らしき十六歳の高島田にかくるやさしきなまこ絞りくれなゐは園生に植てもかくれなきもの中村のお嬢さんとあらぬ人にまでうはさゝるゝ美人もうるさきものぞかしさても習慣こそ可笑しけれ北風の空にいかのぼりうならせて電信の柱邪魔くさかりし昔しは我も昔と思へど良之助お千代に向ふときはありし雛遊びの心あらたまらず改まりし姿かたち氣にとめんとせねばとまりもせで良さん千代ちやんと他愛もなき談笑に果ては引き出す喧嘩の糸口最早來玉ふな何しに來んお前樣こそのいひじらけに見合さぬ顏も僅か二日目昨日は私が惡るかりし此後はあの樣な我儘いひませぬ程におゆるし遊ばしてよとあどなくも詫

びられて流石にをかしく解けではあられぬ春の氷イヤ僕こそが結局なり妹といふもの味しらねどあらば斯くまで愛らしきか笑顔ゆたかに袖ひかへて良さん昨夕は嬉しき夢を見たりお前様が學校を卒業なされて何といふお役か知らず高帽子立派に黒ぬりの馬車にのりて西洋館へ入り給ふ所をといふ夢は逆夢ぞ馬車にでも曳かれはせぬかと大笑すれば美しき眉ひそめて氣になる事おつしやるよ今日の日曜は最早何處へもお出で遊ばすなと今の世の教育うけた身に似合しからぬ詞も眞實大事に思へばなり此方に隔てなければ彼方に遠慮もなくくれ竹のよのうきと云ふ事二人が中には葉末におく露ほども知らず笑ふて暮らす春の日もまだ風寒き二月半ば梅見て來んと夕暮や摩利支天の緣日に連ぬる袖も溫かげに。良さんお約束のもの忘れては否よ。ア、大丈夫忘すれやアしなひ併しコーッと何だッけね。あれだものを出かけにもあの位願つておいたのに。さうさうおぼえて居る八百屋お七の機關が見たいと云つたんだッけ。アラ否嘘ばつかり。それぢやア丹波の國から生捕つた荒熊でございの方か。何うでもようございますよ妾は最早歸りますから。あやまつた〳〵今のはみんな嘘何うして中村の令嬢千代子君とも云れる人がそんな御注文をなさらう筈がない良之助たしかに承はつて參つたものは。ようございます何も入りません。さう怒つてはこまる喧嘩しながら歩行と往來の人が笑ふぢやアないか。だつてあなたが彼様な事許かしおつしやるんだもの。夫だからあやまつたと云ふぢやないかサア多舌て居るうちに小間物屋のまへは通りとして仕舞つた。あらマア何しませうねへ未だ先にもありますか知ら。何だかぞんじませんたつた今何も入らないと云つた人は何處に。最早それはいひッこなしとゝめる

も云ふも一ト筋道横町の方に植木は多しこちへと招けば走りよるぬり下駄の音カラコロリ琴ひく盲女は今の世の朝顔か露のひぬまのあはれ〳〵粟の水飴めしませとゆるく甘くいふ隣にあつ燒の鹽せんべいかたきをむねとしたるもをかし。千代ちやん鳥渡見玉へ右から二番目のを。ハア彼の紅梅がいゝ事ねへと餘念なく眺め入りし後より。中村さんと唐突に背中たゝかれてオヤと振り返へれば束髪の一群何と見てかおむつましいことゝ無遠慮の一言たれが花の唇をもれし詞か跡は同音の笑ひ聲夜風に殘して走り行くを千代ちやん彼は何だ學校の御朋友か隨分亂暴な連中だなアとあきれて見送る良之助より低頭くお千代は赧然めり

中

昨日は何方に宿りつる心とてかはかなく動き初めては中々にえも止まらずあやしや迷ふぬば玉の闇色なき聲さへ身にしみて思ひ出づるに身もふるはれぬ其人戀しくなると共に耻かしくつゝましく恐ろしくかく云はゞ笑はれんかく振舞はゞ厭はれんと假初の返答さへはか〳〵しくは云ひも得せずひねる疊の蓆よりぞ山ともつもる思ひの數々逢ひたし見たしなど陽はに云ひし昨日の心は淺かりける我が心我と咎むればお隣とも云はず良樣とも云はず云はねばこそくるしけれ涙しなくばと云ひけんから衣胸のあたりの燃ゆべく覺えて夜はすがらに眠られず思に疲れてとろ〳〵とすれば夢にも見ゆる其人の面影優しき手に背を撫でつゝ何を思ひ給ふぞとさしのぞかれ君樣ゆゑと口元まで現の折の心ならひにいひも出でずしてうつむけば隱し給ふは隔てがまし大方は見て知りぬ誰れゆゑの戀ぞうら山しと憎く

や知らず顔のかこち言餘の人戀ふるほどならば思ひに身の痩せもせじ御覽ぜよやとさし出す手を輕く押へてにこやかにさらば誰をと問はるゝに答へんとすれば曉の鐘枕にひびきて覺むる外なき思ひ寐の夢鳥がねつらきはきぬ〳〵の空のみかは惜しかりし名殘に心地常ならず今朝は何とせしぞ顏色わろしと蕁ぬる母はその事さらに知るべきならねど面赤むも心苦し晝は手ずさびの針仕事にみだれその亂るゝ心縫ひとゞめて今は何事も思はじ思ひてなるべき戀かあらぬか云ひ出して爪はじきされなん恥かしさには再び合す顏もあらじ妹と思せばこそ隔てもなく愛し給ふなれ終のよるべと定めんにいかなる人をとか望み給ふらんそは又道理なり君樣が妻と呼ばれん人姿は天が下の美を盡して糸竹文藝備はりたることをこそならべて見たしと我すら思ふに御自身は尙なるべし及ぶまじきこと打出して年頃の中うとくもならば何とせん夫こそは悲しかるべきを思ふまじ〳〵他し心なく兄樣と親しまんによも憎みはし給はじよそながらも優しきお詞きくばかりがせめてもぞといさぎよく斷念めながら聞かず顏の涙頰につたひて思案のより糸あとに戻どりぬさりとては其のおやさしきが恨みぞかし一向につからばさてもやまんを忘られぬは我身の罪か人の咎か思へば憎きは君樣なりお聲聞くもいや御姿見るもいや見れば聞けば增さる思ひによしなき胸をもこがすなる勿體なけれど何事まれお腹立ちて足踏ふつになさらずば我れも更らに參るまじ願ふもつらけれど火水ほど中わろくならばなか〳〵に心安かるべしよし今日よりはお目にもかゝらじものもいはじお氣に障らばそれが本望ぞとて膝につきつめし曲尺ゆるめると共に隣の聲を其の人と聞けば決心ゆらゆらとして今までは何を思ひつる身ぞ逢ひたしの心一途に

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

なりぬさりながら心は心の外に友もなくて良之助が目に映るもの何の色もあらず愛らしと思ふ外一點のにごりなければ我戀ふ人世にありとも知らず知らねば憂きを分ちもせず面白きこと面白げなる男心の淡泊なるにさしむかひては何事のいはるべき後世つれなく我身うらめしく春はいづこぞ花とも云はで垣根の若草おもひにもえぬ

下

千代ちやん今日は少し快い方かへと二枚折の屏風押し明けて枕もとへ坐る良之助に亂だせし姿耻かしく起きかへらんとつく手もいたく痩せたり。寢て居なくてはいけないなんの病中に失禮も何もあつたものぢやァないそれとも少し起きて見る氣なら僕に寄りかゝつて居るがいゝと抱き起せば居直つて。良さん學校が御試驗中だと申すではございませんか。アヽ左樣。それに妾の處へばつかし來て居らしやつてよろしいんですか。そんな事まで氣にするには及ばない病氣の爲にわるいから。だつて何うもすみませんもの。すむのすまないのとそんなこと氣にするより一日も早く癒くなつて呉れるがいゝ。御親切に難有うございますですが今度は所詮癒るまいと思ひます。又馬鹿なことを云ふよそんな弱い氣だから病氣がいつまでも癒りやァしない君が心細ひ事を云つて見たまへ御父さんやお母さんがどんなに心配するか知れません孝行な君にも似合はない。でも癒くなる筈がありませんものと果敢なげに云ひて打ちまもる睫に涙は溢れたり馬鹿な事をと口には云へどむづかしかるべしとは十指のさす處あはれや一日ばかりの程に痩せも痩せたり片靨あいらしかりし頬の肉

いたく落ちて白きおもてはいと〻透き通る程に散りかかる幾筋の黑髪綠は元の綠ながら油けもなきいた〳〵しさよ我ならぬ人見るとても誰かは腹斷えざらん限ぎりなき心のみだれ忍艸小紋のなへたる衣きて薄くれなゐのしごき帶前に結びたる姿今幾日見らるべきものぞ年頃日頃片時はなる〻間なく睦み合ひし中になど底の心知れざりけん少さき胸に今日までの物思ひはそも幾何ぞ昨日の夕暮お福が涙ながら語るを聞けば熱つよき時はたえず我名を呼びたりとか病の元はお前樣と云はる〻も道理なり知らざりし我恨めしくもらさぬ君も恨めしく今朝見舞ひしとき痩せてゆるびし指輪ぬき取りてこれ形見とも見給はゞ嬉しとて心細げに打ち笑みたる其心今少し早く知らば斯くまでには衰へさせじをと我罪恐ろしく打まもれば。良さん今朝の指輪はめて下さいましたかと云ふ聲の細さよ答へは胸にせまりて口にのぼらず無言にさし出す左の手を引き寄せてじつとばかり眺めしが。妾と思つて下さいと云ひもあへずほろほろとこぼす涙其まゝ枕に俯伏しぬ。千代ちやんひどく不快でもなつたのかい福や藥を飲ましてゆれないか何うした大變顏色がわるくなつて來たおばさん鳥渡と良之助が聲に驚かされて次の間に祈念をこらせし母も水初穗取りに流し元へ立ちしお福も狼狽敷枕元にあつまればお千代閉ぢたる目を開らき。良さんは。良さんはお前の枕元にそら右の方においでなさるよ。阿母さん良さんにお歸へりを願つて下さい。何故ですか僕が居ては不都合ですかェ居てもわるひことはあるまい。福やお前から良さんにお歸へりを願つておくれ。貴孃は何をおつしやいます今まで彼れ程お待遊ばしたのに又そんなことをェお心持がおわるひのならお藥をめしあがれ阿母さまですか阿母さまはうしろに。こゝ

に居るよお千代や阿母さんだよい〻かへ解つたかへお父さんもお呼申したよサアしつかりして藥を一口おあがりェ胸がくるしいアヽさうだらう此マア汗を福やいそいでお醫師樣へお父さんそこに立つて入らつしやらないで何うかしてやつて下ださい良さん烏渡其の手拭を何だとェ良さんに失禮だがお歸へり遊ばしていたゞきたいとあゝさう申すよ良さんおきゝの通ですからとあはれや母は身も狂するばかり娘は一語一語呼吸せまりて見る〳〵顏色靑み行くは露の玉の緒今宵はよもと思ふに良之助起つべき心はさらにもなけれど臨終に迄も心づかひさせんことのいとをしくて屏風の外に二足ばかり糸より細き聲に良さんと呼び止められて何ぞと振り返へれば。お詫は明日。風もなき軒端の櫻ほろほろとこぼれて夕やみの空鐘の音かなし

たま襷

上の一

をかしかるべき世を空蟬のと捨て物にして今歳十九年、天のなせる麗質、をしや埋木の春またぬ身に、青柳いと子と名のみ聞ても姿しのばるゝ優しの人品、それも其筈昔しをくれば系圖の巻のこと長けれど、徳川の流れ末つかた波まだ立たぬ江戸時代に、御用お側お取次と長銘うつて、席を八萬騎の上坐に占めし青柳右京が三世の孫、流轉の世に生れ合はせては、姫と呼ばれしことも無けれど、面影みゆる長襦袢の縫もよう、母が形見か地赤の色の、褪色て殘るも哀いたまし、住む所は何方、むかし思へば忍が岡の名も悲しき上野の背面谷中のさとに形ばかりの枝折門、春は立どまりて御覽ぜよ、片枝さし出す垣ごしの紅梅の色ゆかしと延びあがれど、見ゆるは萱ぶきの軒端ばかり、四邊は廻ぐらす花園に秋は鳴かん虫のいろ〳〵、天然の籠中に收めて月に聞く夜の心きゝたし、扨もみの虫の父はと問へば、月毎の十二日に供ゆる茶湯の主が夫、母も同じく佛壇の上にとかや、孤獨の身は霜よけの無き花壇の菊か、添へ竹の後見ともいふべきは、大名の家老職背負てたちし用人の、何之進が形見の息松野雪三とて歳三十五六、親ゆづりの忠魂みがきそへて、二代の奉仕たゆみなく、一町餘りなる我が家より、雪にも雨にも朝夕二度の機嫌きゝ怠らぬ心殊勝なり、妻もたずやと進むる人あれど、何の或がこと指き給へ夫よりは孃

さまの上氣づかはしゝ、廿歳といふも今の間なるを、盛りすぎては花も甲斐なし、適當の聟君おむかへ申し度ものと、一意專心主おもふ外なにも無し、主人大事の心に比らべて世上の人の浮薄浮佻、才あるは多し能あるも少なからず、容姿學藝すぐれたればとて、大事の御一生を托すに足る人見渡したる世上に有りや無しや知れたものならず、幸福の生涯を送り給ふ道、そも何とせば宜からんかと、案じにくれては寐ずに明す夜半もあり、嫁入時の娘もちし母親の心なんのものかは、疵あらせじとの心配大方にはあらざりけり、雪三かくまで熱心の聟撰みも、糸子は目の前すぐる雲とも思はず、良人持たんの觀念、何として夢さら〳〵あらんともせず、樂みは春秋の園生の花、ならば胡蝶になりて遊びたしと、取とめもなきこと言ひて暮しぬ、さるほどに今歳も空しく春くれて衣ほすてふ白妙の色に咲垣根の卯の花、こゝにも一ッの玉川がと、遣水の流れ細き所に影をうつして、風なくても凉しき夏の夕暮、いと子湯あがりの散歩に、打水のあと輕く庭下駄にふんで、裳とる片手は透し骨の塗柄の團扇に蚊を拂ひつ、流れに臨んで立たる姿に、空の月恥らひてか不圖かゝる行く雲の末あたり俄に暗くなる折しも、誰が思ひにか比す螢一ッ風にただよひて只眼の前、いと子及ぶまじと知りても只は有られず、ット團扇を高くあぐれば アナヤ螢は空遠く飛んで手元いかゝ緩るびけん、團扇は卯の花垣越えて落ちぬ、是は何とせんと困じ果てゝ、垣根の際よりさしのぞけば、今しも雲足きれて新たに照らし出す月の光りに、目と目見合して立たる人、何時の間に此所へは來て、今まで隱れてゞも居しものか、知らぬことゝて取亂せし姿見られしか、見られしに相違なとし、面俄にあつくなりて、夢現うつむけば、細

く清しき男の聲に、これは其方さまのにや返上せんお受取なされよと、垣ごしにさし出す我が團扇、取らんと見あぐれば恥かしゝ美少年、引かんとする團扇の先一寸と押へて、思ひにもゆるは螢ばかりと思し召すかと怪しの一言、暫時は糸子われか人か、有無の間に迷ひし心、本の心に歸りし時は、卯の花垣に照る月高く澄んで、流れにうつる影我一人になりぬ、さるにても彼の人は誰ならん、隣家は植木屋と聞たるが、思ひの外の人品かなと、其方を眺めて佇立めば、風に傳たはる朗詠の聲いとゞ床しさの數を添へぬ、糸子世は果敢なきものと思ひ捨てゝ、盛りの身に紅白粉よそほはず、金釵綾羅なんの爲の飾り、入らぬことぞと顧みもせず、過ぎし心に恥かしや、我れ迷ひたりお姿今一度見まほしゝと延び上がれば、モシと扣へらるゝ袂の先、誰れぞオ、松野か何として此處へは否や何時の間にと詞有

哉無哉支離滅裂

上の二

丸窓にうつる松のかげ、幾夜詠めて月も闇になるまでにいと子の心その通り、打あけては問ひもならぬ、隣の人の素性聞たしと思ふほど、意地わろく誰れも告げぬのか夫ともに知らぬのか、よもや植木屋の息子にてはあるまじく、さりとて誰れ住替りし風説も聞かねば外に人の有る筈なし、不審さよの底の心ろは其人床しければなり、用もなき庭歩行にありし垣根の際、幾度びか顧りみて思へば、さてもはした無きことなり、氏も知らず素性も知らず、心情も何も知れぬ人に戀ふとは、我れながら淺ましきことなり、定めなき世に定めなき人を頼む、婦人の身はかなしと思もひ絶て、松野が忠節の

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo